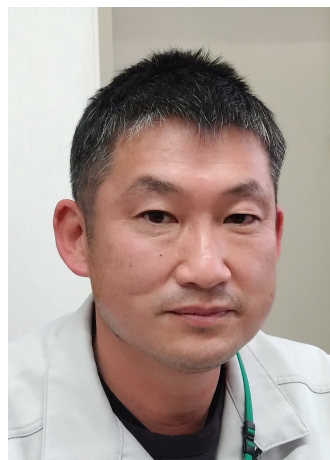


全国茶品評会審査員
埼玉県茶業研究所

梶浦 圭一さん



「全国茶品評会の農林水産大臣賞は、まぎれもなくその年最高のお茶です。この品評会をお茶の甲子園と呼ぶ人もいます。市場性というより、お茶の栽培管理、仕上げ、製茶など総合的に審査してその技術力が問われます。当然生産者でなければ参加はできません」と話してくれたのは埼玉県茶業研究所の梶浦圭一さん（49）。梶浦さんは全国で20名いる品評会の審査員のなかの一人で、第75回大会で松下農園の深蒸し茶を最高賞に選んだ一人でもある。

審査は普通煎茶10kg、普通煎茶4kg、深蒸し煎茶、かぶせ茶、玉露、てん茶、蒸し製玉緑茶、釜炒り茶の部門にわかれて行われる。各茶に7名の審査員がつく。審査員は全国の茶業研究所から選抜された経験豊富な職員で、自分の得意分野の茶を中心に4日間かけて審査をしていく。

「審査員は茶の評価の説明がきちんとできて、的確に欠点を指摘できなくてはならないんです。だからベテランの方が多くなります。場所は関東、近畿、九州のブロックに分けて持ち回りとなりますが場所によって水や光線の具合も変わるのでやっかいです」と梶浦さんは審査の難しさを話してくれた。

出品茶は外観、香氣、水色、滋味が減点方式で審査



される。一種類100点以上のお茶が拝見盆に入られぬが、そこには何の資料も添えられていない。出展者や品種の情報さえない茶が整然と並べられている。まずは外観審査から始まり各審査員は出品茶の拝見盆を回しながら点数を付けていく。最初に満点の付いた物が基準となる。

「まずここで満点が取れないとトップにはなれませ

ん。残りの審査結果が良くても5、6番がいいところ

です。深蒸し茶に関しては

牧之原を中心とした静岡県

産のものが圧倒的に多くな

ります。見た目は少し黄色っ

ぽくて他の産地のものとは

あきらかに違うんですが、

どうも蒸す時間が長いよう

です。ただ静岡の生産者は

技術があるのでぐずぐずボ

ロボロにはならないで、粉

は多くなるけど本茶の部分



はきちんと伸ばせているという印象です。参加茶の品種に『やぶきた種』が多いのは他の品種だとその特徴が不利になることがあるからだと考えられます。作り手の技術力が発揮しやすい品種とも言えます」と話

農林水産大臣賞は「全国という舞台上自分の茶を試してみたい」との思いをもって毎年参加してくる人も多

いが、生涯一回取ればいい方で、何十回参加しても取れない人が多いという。

品評会の後に出品茶入札販売会が開催される。農林水産大臣賞の茶には20万円（1kg）の値段が付くが、その下の農林局長賞には5万円（1kg）と値段にも大きな差が出る。

「有機栽培の茶が受賞したのは初めてだと思います」



静岡県掛川市 松下農園 松下芳春・彰

息づく

と梶原さんは言う。松下さんにも受賞後「有機でこの賞がとれるんかよ」と驚きの声が届いた。

「有機栽培茶が審査会には出てきません。有機で高品質の茶をつくるのは技術的に非常に難しい。香りや味を良くするには、肥料もよく効く即効性のあるものを使う方が有利なるから

です。即効性というところ

で有機は不利です。それだけに今回の受賞は画期的だ

と思います。今後『有機』の枠も別にできるかもしれ

ませんね」

深蒸し茶は日照時間の長い牧之原台地が発祥の地と言われる。山間部の茶とちが

がい、葉肉が厚く渋味の強い茶になりやすい。その茶を時間をかけて蒸すことで

粉は多くなるが渋味が抑えられ甘みの多い茶となる。

掛川市は各茶種の審査成績上位3点の合計審査得点が最上位となる『産地賞』も獲得している。

松下農園で育つ特別栽培茶『ひより』にはこの掛川の地のもつポテンシャルと松下芳春、彰親子の栽培、製茶技術が確実に息づいている。長い間、松下さんの有機栽培に対する取り組みを見てきた私には受賞はむしろ必然のようにも思える。

3月に入ると茶畑に春の肥料を入れていく。温暖化のせいか年々摘採が早まっているように感じる。ぐんぐん伸びる芽を見ながら梶浦さんは「もつとゆつくり

養分を食べてから伸びてよ」と声をかけたくなるという。

